



IUFRO-J NEWS

No. 71 (2000.11) —

第21回ユフロ世界大会

—森林と社会：研究における役割—

2000年8月7～12日 於マレーシア、クアラルンプール

IUFRO 事務局

第21回ユフロ世界大会は、2000年8月7日から12日間の期間、初めて発展途上国で開催された実り多い行事であった。96カ国から210人の随伴者を伴い、総計2,382人が参加するというマレーシアでもかつてない最大規模の会議であった。この参加者の中には、169名の様々な寄付金によって支えられた「Science Assistance Program」の支援によって参加した、38の発展途上国の科学者が含まれている。

会議期間を通して、5つの基調講演が著名な講演者によって行われた。これらの講演は、新世紀に当たったの森林・林業研究における新たな視点を強調し、本会議のテーマとして例示された森林と社会の密接な関係について想起させるものであった。

125の分科会で500件を超える講演が、準公式分科会では88の講演があった。833件の公認ポスター発表—今回の大会では、初めて発表形態として推奨された—のうち500件以上が、会期中に2日間にわたって掲示された。

本会議においては、IUFROに加盟する国々の政府のみならず世界中の政策決定者に対して、林業に関する適切な問題に関する解答が示された。これらの問題とは、人々の暮らしにおける森林と樹木の役割、科学の相互作用を強化する政策決定者による認識、政策と産業、政府の政策決定過程におけるユフロの役割、研究とネット

ワークと学問領域による林業への影響、Global Forest Information Service (GFIS) による情報入手と供給、森林科学における助成あるいは障害を持つ研究者の役割強化などである。



第 21 回ユフロ大会に参加して

松 井 光 瑠

第 21 回ユフロ大会は、2000 年 8 月 7 日～12 日に、マレーシアのクアラランブールで開催された。



写真 台湾大学 名誉教授 吳順昭氏の提供による

ユフロは 1892 年創立以来、大会はヨーロッパ各国で開催されつづけてきたが、1971 年の第 15 回大会に至って初めてアメリカで開催された。以後ヨーロッパとヨーロッパ以外の国とで交互に開催されることになった。第 17 回大会はアジアの日本で開かれ、今回は初めて開発途上国のマレーシアで行われることになった。日本に次いでアジア第 2 の開催国となったわけで、日本を始めアジア各国からの参加が多く、盛会であった。

ユフロは国際的な大きな組織ではあるが、学会の常として、会員の奉仕活動で準備され、運営される。受入れ側は一生懸命にやるわけだが、素人の不慣れにより、海外からの参加者は混乱する。日本大会の時もノルウェーで行われた第 16 回大会の運営委員会に、日本メンバー 3 人を参加させてもらって、大会運営の勉強をしたものだった。

今回のマレーシア大会は、実にスムーズに進行した。研究発表会の進行は研究者によるものであったが、会場の設営、受付事務、開会式、同夕食会、閉会式、同夕食会、展示会場の運営等は、イベント関連会社の運営によったものであろう。それにしても学会慣れしたものであった。

初日の Registration は毎回混雑するのが例であるが、気抜けするほど簡単に済んだ。既に印刷の完了した、Sub-Plenary Sessions の要旨集 (952 頁)、Abstracts of Group Discussions (567 頁)、Poster Abstracts (415

頁) の 3 部を手渡された時には、その重さに圧倒された。もっとも、この 3 冊分を収録した CD も用意されていた。

会場は、市の中心部を離れた、国際貿易センターという建物で、大中小の講堂、会議室、ポスター展示用室、各国共用の展示ブースなどが余裕を持って用意されていた。視聴覚機器も会議の運営を助けるに充分なものであった。

大会内容の構成は、今までの流れにのったものであるが、今大会のテーマが“Forests and Society : The Role of Research”であったので、毎朝行われた全体会議の基調講演は、この大会テーマを敷衍する次のものであった。

1. マレーシア総理大臣特別顧問, Razali Ismail : Sustainable Management of Natural Resources.
2. 米国 Weyerhaeuser 社科学顧問, Christine Dean : Matching Research to Society Needs.
3. ボリヴィア, 環境法教授 Antonio Andalus-Westreicher : Changes in Environment and Society.
4. 米国森林局研究担当次長, Robert Lewis, Jr. : Cultural Diversity in Forest Management.
5. インドの生態学者, M.S. Swaminathan : A Global Vision of Forests and Society.

午後の前半は、大会テーマに沿った総合課題を論議する Sub-plenary Session で、A～E の課題に分けられ、繰り返し行われた。その課題は、

- A) Sustainable Management of Natural Resources (6 回)
- B) Forests and Society Needs (5 回)
- C) Changes in Environment and Society (4 回)
- D) Cultural Diversity in Forest Management (2 回)
- E) The Global vision of Forests and Society (3 回)

ちなみに、E 課題の内容を例示すると

- ① Interaction between Forest Science and Forest Policy.

- ② Networking and International Cooperation.
- ③ Regional Scenarios in Management of Forest Resources in the Tropics.

であった。

熱帯林資源の急激な減少問題、都市住民と林業従事者との相互理解の不足など、現代の森林研究の欠落部分について考え直すのに、誠に時宜を得た大会テーマであったと感じた。日本の森林研究機関の体制も、新年度とともに変わろうとしている。その際、Forests and Societyは重要な基本問題となるだろう。

午後の後半は、各専門分野毎の研究発表が多く部屋で同時に行われた。日本大会時には6部門だったものが、現在はForest HealthとForest Environmentの2部を加えて、8部となっている。Forest Healthの中には、Pine Wilt DiseaseのResearch Groupができている。他地域からの侵入病害として、その発病メカニズムと対策について論議が行われていた。

Poster Sessionは、外国語はあまり得意でない日本人に向いているだろうということで、日本大会で始めて採用されたものだが、図や絵を利用して直接質疑応答ができる点が好評で、以後毎回行われ、今回は大きな部屋に519もの展示発表が行われ、参加者も多かった。8部枚に優秀発表者が1名づつ選ばれ、閉会式で表彰された。

私は、参加しなかったが、大会の重要な行事であるPost Congress Excursionsも、13ルートが用意され、マレーシア各州のみならず、タイ・インドネシアおよびブルネイのコースがあり、熱帯林の理解には良い機会であったと思われる。

今期中に各研究団体の集いも随時行われていた。CIFOR, ITTO, CABI, APAFRIなど19を数える。

今回は、関連団体の展示ブースも目立った。研究集いの合間に、ブースに集まり多くの人々が談笑している姿

は、学会の楽しい一面であろう。出展は各国の研究団体、機器関連会社、国際協力機関、学術出版社、大学、木材関連会社等々多岐に渡り、約50機関に及んでいた。日本の実力や実績を知ってもらい良い機会であったのに、日本からの出展がなかったのは寂しかった。

最後の閉会式には例年通り、学術賞や功績賞の授与が行われた。日本の小林富士雄氏には理事会活動への功績によりトロフィカ贈られた。日本大会で決まったSPDC (Special Programmer for Developing Countries) 計画の下で、BIO-REFORやAPAFRIの結成、運営に努められた功績が評価されたものと思う。

2001年1月からの新しい理事会メンバーが決定発表され、会長にはフィンランドのRisto Seppala氏が選ばれた。同氏は、メンバーのチームワークの重要性を述べるとともに、会員の増加に努力したい旨強調した。

次期大会は5年後にオーストラリアで開催されることが決まり、ユフロ旗が代表に手渡された。オーストラリアは同国への歓迎の意をアボリジニーの長大ホルンの吹奏で現した。同年行われたオリンピック大会でのアボリジニーの活躍と合わせて考えて、世界の流れを感じたものだ。大会決議をもって閉幕した。

今回、久しぶりに大会に出席し、日本大会時の会長Walter Liese (ドイツ)を始め、Dusan Mlinsek (スロベニア、当時ユーゴスラビア)、Robert E. Buckman (米国)、M.N. Sallehの各氏に会うことが出来た。それぞれ竹材利用の研究、天然林施業、国際林業論教育、熱帯林研究に情熱を傾けている姿に接し、多に啓発され、若返った気持ちで帰国できたことに感謝している。

付: 今回 "International Union of Forestry Research Organizations" のForestryをForestに改めることになった。

国際森林研究機関連合とすべきか。

第 21 回国際林業研究機関連合世界大会の報告

—マレーシア・クアラルンプール、ポスター発表を中心に—

東京大学千葉演習林 山中 征夫

はじめに

2000年8月7日から12日まで、マレーシアの首都・クアラルンプールのプトラ・ワールドトレードセンター(PWTC)において、第21回国際林業研究機関連合の世界大会が開催されました。メインテーマは“Forests and Society: The Role of Research”でした。21世紀に向けて、森林・林業の持続可能な発展とそれを取り巻く人間社会の諸矛盾を解決するため、世界の90ヶ国以上から2,300人を超える研究者および関係者が参加しました。そして、連日、熱心な議論が展開されました。なお、日本からの参加者は同伴者を含め約200人で、主催国のマレーシアを除くと、一国としては最も多い参加者でした。

私は8月6日から9日まで、クアラルンプールに4日間滞在しました。7日の開会式の後、早速、ポスターの展示準備を行いました。そして、8日と9日の2日間、ポスター発表「The land leech, *Haemadipsa zeylanica japonica* (Gnathobdellida: Haemadipsidae): Study of Biological to Control its Biohazard」を行いました。9日の午後7時にはポスターを撤去して、そのままクアラルンプール国際空港に向かい、深夜便で帰国するという、あわただしい日程でした。なお、8日の午前中に時間を割いて、マレーシア国立博物館に行きました。マレーシア産の陸棲吸血ビルの展示見学や資料収集を期待しましたが、残念ながら展示も資料もありませんでした。

開会式と歓迎式典

世界大会の初日(8月7日)は、まず、会場のPWTCで参加登録の確認等を行いました。私は事前登録をしていなかったため、登録手続きと参加費を支払い、名札をもらいました。そして、次に手渡されたのが特製バックでした。なかには「SUB-PLenary SESSIONS vol. 1」「ABSTRACTS OF GROUP DISCUSSIONS vol. 2」「POSTER ABSTRACTS vol. 3」をはじめ、大会スケジュールなど、大会必要グッズ一式が入っていました。総ページ数は2,000ページを超える膨大なもので、総重

量は5kg以上ありました。

開会式(写真-1)は開始予定の午前9時30分より若干遅れましたが、式次第にそって進められました。初めに、マレーシア政府の要人、IUFROの代表者、WHOの代表者等の挨拶があり、次に、森林・林業に関する国際的な研究業績のあった研究者に対する表彰、最後に、本大会の基調演説がありました。その間に、アルファベット順に参加国ごとの参加者の紹介があり、また、歓迎の民族音楽・舞踊等があり、12時30分まで行われました。3,000人収容できる大会場でしたが、ほぼ満員でした。

本大会の基調講演はTAN SRI RAZALI ISMAILさんが行いました。TAN SRI RAZALI ISMAILさんはマレーシアの首相特別補佐やマレーシア国立大学の教授等の要職につかれています。講演で強調されたことは、まず第一に、人間の身勝手な開発行為によって、森林の枯渇、動植物の絶滅、水や大気汚染などが進み、今や人間を含めた生物にとって、地球そのものが極めて深刻な危機的状況にあるということでした。次に、特に、森林を取りまく状況について、今日の世界的な森林の急激な消失によって、森林の機能とその多大な人間生活に対する貢献が根こそぎ破壊され、この状況が今後も続けば、人間生存の持続性が危ぶまれるような状況になるとの指摘でした。この危機的状況を突破するためには、人々は森林の大切さを学ばなくてはならないし、ま

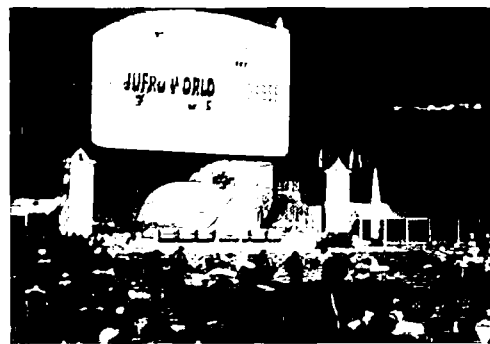


写真 1



写真 2

た、森林の持続可能な発展に向けて、あるいは未来に対する現代人の責務として、森林の保存と保全に関する倫理観を養成することや、森林の保存と保全と回復に必要な資金の世界的な規模での調達方法を見つけ出すこと、などが重要であるとの指摘でした。天然資源の賢い利用法の一つとして、森林の保存・保全・回復に向けて、全世界の国家および国民が個別的利害を払拭して、すべての国や人々が真摯に取り組むべきであると強調しました。最後に、同氏は天然資源、とりわけ森林資源の略奪的利用をやめ、将来に対して森林機能の維持・発展を確実なものにしていくための研究と、具体的な提案として、「木を植えることは万物を生きかえらす根本である」と述べ、地球規模での森林の再生に全世界の国家および国民が努力するよう強調しました。

また、午後7時30分から歓迎パーティ(写真-2)が開催されました。マレーシア政府の要人等の歓迎の挨拶や民族舞踊、有名歌手による民族歌謡などが披露され、終始なごやかな雰囲気の中で、午後9時30分まで行われました。なお、パーティには、アルコール類は一切ませんでした。

ポスター発表

8月7日午前の開会式が終わって、午後はポスター発表の準備に取りかかりました。ポスター展示会場(写真-3)は、縦約50m×横約60mの広さがあり、両面で約60枚のポスターが貼れるボードが14列並び、総計で約850枚のポスターが掲示できるようになっていました。私のポスターは、「Division 7 Forest Health」の「ボード番号710」に展示するようになっていました。ポスターの展示を始めたところ、私の所にハサミやセロハンテープなどを借りてきた人もいました。近所のポスター発表者同士が助け合いながら、和気藹々のうちに掲示を



写真 3

完了しました。

ポスターはテーマごとに、Division 1から8までと、Task Force 1から7までの2種類に分かれていました。Division 1から8までのそれぞれのテーマは、順番に「1 Silviculture」、「2 Physiology and Genetics」、「3 Forest Operations and Techniques」、「4 Inventory, Growth, Yield, Quantitative and Management Sciences」、「5 Forest Products」、「6 Social, Economic, Information, and Policy Sciences」、「7 Forest Health」、「8 Forest Environment」でした。また、Task Forceは1から4までと、7があり、10枚の展示がありました。

9日の午前中、すべてのポスターを見ようとDivision 1から巡回を始めました。発表予定のポスター数は約850枚ありましたが、実際に掲示されたのは465枚でした。半分をちょっと超える数しかポスターがありませんでした。また、私の発表したDivision 7-Forest Healthでは、106枚の発表予定に対して、掲示されたのは52枚でした。発表されたのは半分以上でした。なお、私のポスター(写真-4)の左隣はマレーシアのMaziah

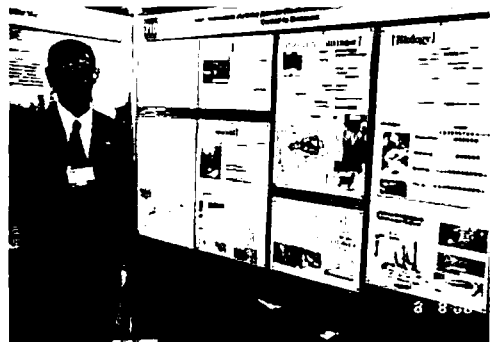


写真 4

Zakariaさんの「Diseases and Disorders of *Azadirachta excelsa* in Peninsular Malaysia」、右隣は日本の森林総研の山田利博さんの「Relationship Between Fungal Spread and Defensive Responses in Japanese Cedar Sapwood Inoculated with *Guignardia Dieback Fungus*」でした。ポスター発表には1課題あたり、縦120cm×横180cmのボード1枚が与えられました。どのポスター発表者も、すこしでも見学者の関心を引こうと、コンピュータグラフィックスの活用や立体的な造形など、いろいろな工夫を凝らして、自分の主張を認めてもらうための涙ぐましい努力をしていました。なかにはA3用紙1枚の人もいれば、ボードをはみ出して掲示している人など様々でした。私もポスターの写真を大きくしたり、文字の大きさを工夫して、見やすく、わかり易い展示にする努力が足りなかったと反省しました。

私はポスター発表の8日と9日の2日間、見学者の意見や質問等に応えられるように、午後1時から4時30分ごろまで、ポスターの側に待機していました。幸いにも、陸棲吸血ビルの生態と防除に関する発表が珍しいのか、8日には25人、9日にも20人ほど、アメリカ、インド、シンガポール、タイ、大韓民国、日本、フィリピン、マレーシアなどからの参加者に、私のポスターの前で立ち止まっていただき、ヤマビルの生態や防除に関する質問を受けました。また、それぞれの国での陸棲ビルの生息状況等についての説明や情報等を伺うことができ、とても有意義でした。質問のなかで最も多かったは、「どのような理由で、(こんな気持ち悪い)ヤマビルの研究を始めたのか?」でした。私は10年前、偶然にも見たヤマビルの卵のうの美しさに魅了され、そのことがヤマビルの研究を始めたきっかけになったことを説明しました。また、ちょっと困ったのは、会話のなかで、陸棲ビルと水

棲ビルとの話が混同してしまって、多分に私の語学力不足の問題だと思いますが、十分な意思疎通ができなかったことでした。最初は心配しましたが、なんとか無事に終わって、ほっとすると同時に、とても楽しい2日間でした。

おわりに

私は本世界大会の前半だけの参加のため、開催前のPre-Congress Meetings、大会中日(10日)のIn-congress Tours、大会後のPost-congress Excursionsには参加できませんでした。また、参加期間中は、もっぱらポスター発表に集中してしまい、重要な講演や種々の会合に参加できず残念でした。日本に帰国してから、In-congress ToursやPost-congress Excursionsに参加された方から現地の森林内で撮影した陸棲吸血ビルの写真を見せていただきましたが、そのなかの1種は日本の秋田県から鹿児島県・屋久島に生息しているヤマビルとそっくりでした。実物を見られなかったのが誠に残念でした。また、ポスター会場で10人ほどの人と名刺の交換も行い、今後、メール等による陸棲吸血ビルに関する情報交換が楽しみとなりました。

なお、8月12日の大会決議等の重要文章については、9日夜に帰国してしまった私には報告できないので、どなたかにお願しなければなりません。また、世界大会の様子は、当日のトピックスが日報「BELANTARA IUFRO2000」として発行されていますので、そちらを参照してください。最後に、今回の第21回国際林業研究機関連合世界大会への参加にあたって、国際林業研究機関連合・日本委員会から参加助成費をいただきました。感謝申し上げます。

第21回ユフロ世界大会参加報告

富山県林業技術センター林業試験場 小林 裕之

はじめに

2000年8月にマレーシアで開催された第21回ユフロ世界大会会議(8/7-8/12:クアラルンプール市)およびエクスカージョン(8/13-8/16:サバ州)に参加する機会を得ました。特にサバ州は、かつて私が青年海外協力隊員として2年間滞在した地であり、帰国後12年が過ぎた今、何がどう変わったのだろうか、旧友達に会うことができるだろうか、等々の思いが交錯し、出発前から静かな興奮状態が続いておりました。以下、日記風に参加報告をさせていただきます。

8月7日:会議1日目

ホテルから会場へ徒歩で向かい、会場対面までは到達したのであるが、通勤ラッシュでひっきりなしに車、オートバイが通る片側3車線の道路を渡ることができず、結果的にはずいぶん遠回りをしてしまい、汗だけで会場に到着。会場内は一転して強烈に冷房が効いていた。参加登録を済ませた後、開会式に参加。サマースーツの上着を羽織っても寒いくらいで、早くも体調不良の予感。午後のセッションを聴講しながら、合間をみてポスターを貼る。ウェルカムディナーでは、同僚の相浦英春氏と共に、まだ誰も座っていないテーブルに着いた。その後サバ州のサバ財団から来た女性2名、男性1名のグループが来て一緒にになり、サバの話に花が咲いた。飲み物はオレンジジュースだけで、最後までアルコールは出なかった。

8月8日:会議2日目

サバ州森林局の展示ブースで、私が携わった森林水文プロジェクトの紹介パネルを見つけた。量水堰周辺の写真中に、かつて私が白ペンキで手書きした試験地名の文字を見つけて感激。「これは私が書いたんだ!」と、説明員の女性に話しかけ、英語、マレー語チャンポンでその経緯を説明したり、旧知の職員のことを尋ねたりした。

午後2時から4時15分までがポスター発表のコアタイムであった。私の発表タイトルは、"Characteristics of landslide distribution in the Toyama prefecture, Japan - Spatial analysis with GIS" というものであった。同僚の相浦氏とさっそく証拠写真(写真-1)を撮り合い、お客さんを待つ。顔見知りの日本の先生方が半ば

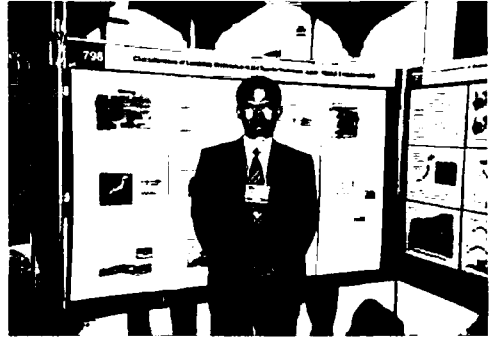


写真 1

義理?で見に来てくださり、日本語で説明や討論をさせていただいたのだが、一見さんの外国人は誰も来てくれない。通りすがりの外国人を捕まえて無理やり説明させてもらう程には、研究内容にも英語力にも自信がなく、暇だなあと思っていたら、終了間際にウェルカムディナーで一緒だったサバ財団の女性が見に来てくれ、英語で説明らしきことをさせてもらった。

夜は日本人グループに混ぜてもらい、名所のツインタワーで中華料理を食べたが、風邪気味で頭が痛くてさっぱり調子が出なかった。

8月9日:会議3日目

この日も午後2時から4時15分までがポスター発表のコアタイムであった。日本人が数名来てくれた以外に来客なし。隣にポスターを貼っているインド人は現れない。立ち通しで膝が痛いし、風邪気味で頭がボーッとしている。もう誰も来ないだろうと思い、他のポスターを見て回った。コアタイム終了と同時にポスターを剥がして丸め、掃除係の人に捨ててもらうように手渡した。ここで安易にポスターを捨ててしまったことが後に重大な結果を招くこととなった。

8月10日:会議4日目(インコングレスツアー)

私は、ルート1のマラッカへの旅を選択した。ゴムの老木を使った家具工場とポルトガル時代の要塞跡などを見学したのであるが、工場視察の時間が長かった反面、マラッカ市内の観光にほとんど時間が割かれておらず、ゆっくり歩き回ることができなくて少し残念だった。

8月11日：会議5日目

午前中は特に聴講したい発表もなかったので、エクスカッションでは邪魔になるであろう発表要旨集など資料一式を職場宛に送った。

午後2時30分から4時15分までの時間帯における私の作戦は、自然災害部門(8.04.00)で3件の発表を聞いた後、リモートセンシングおよびGIS部門(4.12.00)の発表を聞くというものであったのだが、自然災害部門でハプニングが起こった。会場に着くと京都大学の佐々恭二先生がおられたので、挨拶がてら、「ポスター発表では見に来てくれた人が少なく寂しかった。」と、つい軽い気持ちでしゃべってしまったら、「口頭発表予定者7名のうち2名がキャンセルして時間が空くので、それじゃあポスターの要旨を5分ほど話さない。」と言われてしまった。がーん！ポスターは既に捨て、要旨集も送り、自分の発表内容もだいぶ忘れてしまっていた私は、よほど泣き言を言って逃げようかとも思ったが、せっかくのチャンスなのでしゃべらせてもらうことにした。それから他人の発表は上の空で、自分の発表要旨を思い出しながら、話す内容をひたすらノートに英語で書き出した。私の発表がセッションの最後であり、時間も押していたので質疑応答はなく、内容を理解してもらえたかどうかはさておき、何とか乗り切ることができた(写真-2)。

8月12日：会議6日目

午後7時30分からフェアウェルディナーがあった。ウェルカムディナーと異なり、有料だがアルコールがあるのがうれしかった。途中から国別合唱大会になり、日本に順番が回ってきたときに2番目にステージに上がったのは私であった。曲目は、「上を向いて歩こう」で、歌詞を全部知らない私は、途中から近くのご婦人にマイクを渡した。後で聞いたら東京大学の箕輪光博先生の奥様とのことだった。マレーシア滞在も1週間が過ぎ、全盛



写真 2

期の5割くらいにマレー語力が回復してきたように思えた私は、地元 FRIM (Forest Research Institute of Malaysia) の女性職員達と楽しく会話をさせてもらった(写真-3)。明日は朝5時集合なので早めにホテルに帰って寝なければと思いつつ、結局最後のマレーシアの歌まで居座ってしまい、12時過ぎに就寝。

8月13日：エクスカッション1日目

午前3時起床。眠い。クアラルンプール、コタキナバル、サンダカンと飛行機で移動。移動中に睡眠時間を稼ぐ作戦だったが、10年以上振りのサンダカン再訪に興奮して眠れない。サンダカン空港では、マレー人の少年太鼓隊が出迎えてくれた。以前はただ広だけの構内だったが、今はジュースの自販機や土産物屋などがある。知り合いがいないかときまろきまろするが見当たらない。バスでセビロクのオラウタンリハビリセンターへ(写真-4)。さっそくみんなで記念撮影(写真-5)。私が協力隊員だった当時(1986-1988年)、このセンター内では、人間とオラウタンの分離ができておらず、互いに触ったり触られたり状態であったが、現在では来訪者は木製の歩道上を歩くようになっており、オランウータンと



写真 3



写真 4



写真 5

人間との分離がしっかりできていた。雨上がりの森林内はまるでスチームサウナに入っているような暑さと湿気で、じっとしていても汗が噴き出し、現地の観光客さえもうんざりしているように見えた。タオルで汗を拭きながらぐったりしていると、サンダカンで我々ユフロー一行のお世話をしてくれた、S.I. Tours という旅行会社の女性が私に話しかけてきた。何と彼女は、かつてサンダカン中央市場で野菜を売っており、当時自炊をしていた私が市場へ行くといつも、「マスター、サユール（マレー語で「野菜」のこと）」といつも声を掛けてくれていた、中国系の当時二十歳くらいの女性だったのである。何でも、野菜を売って蓄えた資金を元手にして会社設立に参加し、現在は Managing Director という肩書きを持っているとのことだった。今や起業家となってしまった彼女がちょっとびまぶしく見えた。

リハビリセンターの次は、サバ州森林局の研究所を見学した。私は協力隊員時代に、この研究所ではなく、森林局の本庁に勤務していたのであるが、当時本庁の電話交換手で、結婚式にも立ち会ったマレー系の女性が異動で研究所に来ているという情報をつかんでいた。しかしながら当日は日曜日で、説明担当者だけが出勤しており、彼女に会うことができなかったのが残念だった。

8月14日：エクスカージョン2日目

森林局のランドクルーザー十数台に分乗し、Deramakot Forest Reserve へいざ出発。私は、顔見知りの Sulaiman という運転手の車に、東京農工大学の岩岡正博先生、相浦氏と同乗した。舗装、未舗装路を激走して3時間余りで現地に到着。Deramakot では、Malaysian-German Sustainable Forest Management Project というものが1989年から行われており、1997年には東南アジアで初めて天然林部門での森林認証を受けたとのこと。環境インパクトの少ない伐採（写真-6）、搬出方法（索道の使用やブルドーザの排土板を少し持ち



写真 6

上げての地引きなど）が採用されていたり、中国系コントラクターがしっかりと造林、保育データをコンピュータで管理していたり、木材の持続的生産を可能とするための伐採計画が策定してあったりなど、実に見どころの多いプロジェクトであった。サバ州森林局のパートナーが日本の JICA ではなくて GTZ（ドイツの JICA）であったということに多少寂しさも感じたが、ここは素直に GTZ に拍手を送りたい。

夕食後、午後10時くらいから日本人4人でサンダカンの街へ繰り出す。かつて海賊版？音楽カセットテープを売る屋台のスピーカーから流れる音楽でうるさいほど賑やかだったナイトバサール（夜市）には、カセット屋さんはいなくなり、また時間が遅かったせいか人影もまばらで、食堂が20軒ほど静かに営業していた。バサール近くの、昔よくサテーを食べたお店はまだあったが、お目当てのサテーは売り切れで、ビールだけを飲んだ。かつて海だった場所が埋め立てられ、新しい道ができていた。中央市場2階の食堂もすでに閉店済みで、海へ顔を出し、野菜くずの腐ったものと潮の香りの混じった、懐かしいにおいを久しぶりに嗅いだ。最後にカフェでコピス（練乳入りコーヒー）を飲んだ。

8月15日：エクスカージョン3日目

サンダカンからコタキナバルへ飛び、バスでキナバル公園へ。疲れからか、バスの中では終始眠っていた。夕方から腹が痛くなった。

8月16日：エクスカージョン4日目

朝コタキナバルの市場の回りを散歩。珊瑚礁の島までボートで十数分なのに、時間がなくて行けずに残念無念。コタキナバルからクアラランブルへ飛び、

おわりに

今回の大会参加に際し、IUFRO-J から助成を受けたことに深謝して報告を終わります。

ユフロ世界大会報告—経営部門を中心に—

三重大学生物資源学部 松村直人

本誌前々号で佐々木さんが招待文を寄せていたマレーシアでのユフロ世界大会に参加しましたので、その概要を報告します。

1. はじめに

第21回のユフロ世界大会は8月7日から12日までの間、マレーシアの首都クアラルンプール(KL)市内のブトラ・ワールドトレードセンター(PWTC)にて開催された。途上国では初めての、またアジアでは京都に続いて2度目の世界大会となった。月曜から土曜までの日程のうち、半ばの木曜に1日ツアーが組まれ、開会式から全体会議、サブ全体会議、分科会、ポスター発表、サテライトミーティング、ビジネスミーティングなどが組み込まれ、閉会式が開催された。その後、海外も含め多彩な研修旅行が設定されていた。

2. 開会式と全体会議の概要

メインテーマは「森林と社会：森林研究の役割」であり、開会式では、Razak 大会委員長（マレーシア森林研究所(FRIM) 所長）、Burley 会長らの挨拶があった。マハティール首相も出席予定であったようだが、農林行政を担当する第一次産業省大臣 Keng 氏からの代理スピーチとなった。Burley 会長は「各国諸問題の解決に貢献する森林研究」の必要性を強調していた。

式中、名誉会員への推薦があり、前 FRIM 所長で前 IUFRO 会長でもあった Salleh 氏とスイス連邦林業試験場の林政学者シュミットヒューゼン氏がそれぞれ永年の IUFRO への貢献によって表彰された。その後マレーシアのショートタイムがあり、各国参加者が順番に起立を求められたりして楽しい開会式であった。

その後キーノートの発表に移り、エクスカージョンの木曜を除き、毎日土曜日まで発表は続いた。タイトルは「天然資源の持続的管理」、「研究の社会的要請への貢献」、「環境と社会の変化」、「森林管理における文化的多様性」、「森林と社会の地球規模の展望」であった。サブプレナリは分科会方式で行われ、この後、閉会式でまた大会議室に集合することになった。

3. 部門別分科会の概要

全体会議の各テーマ別に20のサブプレナリのセッションが設定され、口頭発表中心であったが、ポスター発表を併用した部門もあった。経営関係では「持続可能な森林経営」をキーワードにした発表が多かったが、経営と熱帯造林の合同セッション、ミレニアムに言及したレビュー、FAOのFRA2000に関したものなどに特徴があった。

具体的な発表例としては、「山岳フタバガキ林の2回目の伐採-成長モデルの応用」(Harun, Appanah)「年間許容伐採量推定のための新しいアプローチ-マレーシア・サバの事例」(Heuveldop 他)、「ベネズエラにおける天然林モデルと持続可能な森林経営」(de Bello 他)、「世界の木材資源」(Youngquist)、「木材収穫計画の原則」(von Gadow)、「東南アジアにおける持続可能な木材生産」(Appanah 他)「アメリカの国・地域レベルにおける持続可能な森林経営のための基準と指標」(Haynes)、「世界の森林面積の現状と将来予測」(Paivinen) などである。

その他、森林資源調査関係では、ドイツの事例(Akca)、イタリア(Negri)、台湾(Feng)など、住民参加・意志決定支援に関しては、「FLORESの開発」(Vanclay)、「フェジーモデルの応用」(Thorne)、「住民参加型計画への空間的アプローチ」(Hytonen)、「基準・指標の応用」(廣島)、「半島マレーシアのドイツ型ODA」(Muziol)、「GISを用いたサバ州森林保全計画の事例」(Phua 他) などがあった。

その他のキーワードとしては、「Reduced Impact Logging (RIL)」に言及した発表も多く、経営や利用部門の研究者の連携による事例報告もあった(上述のAppanah 他、Muziol 他)。成長モデルやソフト開発については、まだ開発中(SYMFOR2000, Philips)、現地で適用実験中(FLORES, Vanclay)ながら、インターネットで情報公開しているものもあった。また択伐林の蓄積が多く、持続性と経済性に勝るとする報告(Sterba)も興味深かった。

森林資源や林業情報のデータベース化が進み、インターネットでの情報提供サービスに関する分科会や研究

グループも設定されていた (Global Forest Information Service, GFIS)。また個人的にも関係していた SilvaVoc の多言語用語集に関する発表もあった (Lund, 松本, Pruller など)。

4. ポスター発表の概要

ポスターの発表はセッション別の会場と広大なスペースを利用した全体発表とに分かれて、8日、9日の2日間の午後各2時間をコアタイムとして行われた。合計約900の発表予定であったが、残念ながらキャンセルが多く、せっかくのスペースも3割くらい空いてしまったので、事務局が急速生物写真を展示したりしていた。

筆者自身も半島マレーシアの JICA 複層林プロジェクトで行った有望郷土樹種の選択と経営モデルの作成についてポスター発表したが、関心のある方は初日にほぼ見に来たようで、2日目は会場も閑散としていた。同じようなケーススタディをやっている研究者とも知り合うことができ、ゆっくりと議論もできたし、今後の情報交換を約束する等、有益であった。

発表に関してはパネルが特殊表装のためピンや通常のテープは使用禁止で、専用のマジックテープしか使えなかったこと、傷めた場合には弁償ということで神経を使った。今回は各部門ごとに「ベストポスター賞」を設けたため、詳細なチェックシートを持った審査員が巡回していた。各賞は閉会式の時に表彰された。またフィンランド森林研究所 (Metla) が統一ロゴ入りのポスターで発表しており、目を引いた。森林総研も発表数では負けていないと思うので、統一デザインをベースに発表すればアピールできたかもしれない。発表内容については、個人的関心から GIS の応用面、リモートセンシングを利用した生物多様性評価、フランス、ブラジルなどの

ODA 関係の熱帯林修復、成長モデルなどの発表を見て回った。

5. 林業展示の概要

1階フロアの一角を利用して、様々な機関展示などが行われた。CAB インターナショナルなどの出版社、NGO、政府、研究機関、FAO、ITTO や APAFRI などの展示があった。

6. エクスカーション

10日は9コースに別れて1日見学旅行が企画された。伝統的なゴム産業やマラッカ見学、カブール林、マングローブ林の見学やオランアスリ原住民文化の視察などのプログラムがあった。筆者は低地熱帯林の大面積生態調査と林冠のツリーウォークで有名なパソーの見学に参加した。2つのグループにバスが各2台配車され、ネグリセンビラン州の博物館や森林公園 (エコツーリズム & レクリエーション林) を訪問した後、FRIM が継続調査しているパソーの調査林を見学した。現地では伐採前後の更新調査や林冠調査、今後の実験計画などについて説明された。日本人では富山県林試の相浦氏、森林総研四国支所の稲垣氏らと同乗した。

なお、KL 近郊のコースでは突然のスコールにより計



写真1 ポスター発表会場



写真2 パソー入り口



写真3 試験地での説明

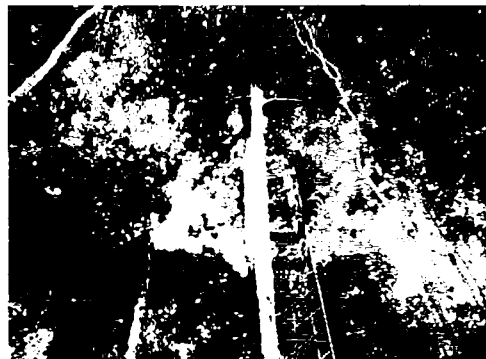


写真4 パソアのタワー

画変更を余儀なくされたグループもあったようである。

7. 閉会式の概要

12日夕方より閉会式が行われ、Burley 会長の挨拶、運営委員長の Rahim 氏の報告、ベストホスター賞の発表、大会宣言、新しい役員メンバーの紹介などが行われた。Rahim 氏によると最終的には同伴者も含め、91ヶ国から2,300人の参加があったがキャンセルが多かったこと、特にポスター発表については40%程度しか行われなかったとの報告があった。また途上国からの参加者の中には、予算が取れず、キャンセルした場合も多かったとのことであった。

また、今回の大会では初めての試みとして、研究発表プログラムの作成をウィーンで調整し、現地の運営委員会と機能分担を行ったが、結果的には失敗した。このこともキャンセルが多発した要因と思われる。ウィーン本部と、各分科会ごとの企画責任者との連絡がうまくいかず、インターネットを利用してホームページでの発表受理情報なども流していたが実際には受理されていない等、申込者も最後には参加をあきらめたケースもあったと思われる。

次期の会長はフィンランドから選出され、副会長の一

人には韓国から Lee 氏が選出された。その他 IUFRO への功労賞の発表もあり、元 IUFRO-J 議長小林富士雄氏も表彰された。次回 22 回大会の開催地であるオーストラリアの紹介ビデオとアポリジニのパフォーマンスなどもあって、閉会となった。

8. おわりに

IUFRO 世界大会への参加は初めてであったが、やはり少し規模が大きすぎて個人的には気ぜわしかった印象である。マレーシアとしては一大国家プロジェクト並に精力も投入し、事業的には大盛況で、成功裏に終わったといえるであろう。ホテル、市内の移動や食事など滞在に関してはほとんど問題はなかった。一見先進国並ではあるが、機械の故障などは多かった。

熱帯では冷房が最高の贅沢であるのか、冷房の効きすぎで会場が極度に寒く、風邪を引いた参加者も多かった。また、大会資料集も3分冊の大部なものになり、CD-ROMでも配布された。臨時ニュースレターも毎日発行されて会場で配布され、一般紙にも大きく取り上げられていた。また空港に着いてから市内に入るまでも大会の旗がひらめき、実行委員会の熱意が感じられた。

IUFRO-J News No. 71 平成 12 年 11 月 31 日
 国際林業研究機関連合・日本委員会事務局
 茨城県稲敷郡基崎町松の里1 森林総合研究所内
 TEL 0298-73-3211 (232) [編集・発行]